【論文】

複文構造から見た接続表現の分類について

長谷川　守寿

Classification of Connective Expressions as Found in Complex Sentence Structures

Morihisa HASEGAWA

南不二男（1974）の接続表現をもとに、複数の従属節間の係り受け関係を明示する複文規則の記述を、複文解析システムを用いて行った。その結果165個の規則が得られ、全体の解析では約87％の精度で正しい結果が得られ、解析対象を変更した解析で規則の有効性が検証された。また複文規則から、従来の研究の枠組みでは分類が不十分な接続表現について考察を加えた。具体的にはカラを事実的表現という観点で分類すること、シを二分すること、タラ・ト・バを仮定的用法と事実的用法に分類すること、トの分類には前置き的表現という観点を用いることを挙げた。さらに連用(テ)形は優先される解釈の定義が必要となること、ガ・ケレドはモダリティ表現的な節という観点の必要性を挙げた。

キーワード：複文、接続表現、分類、複文構造、係り受け

１．目的

本研究の目的は、接続表現を基に複文構造を導出する処理を通して、複数の従属節間の構造を明示する複文規則の記述を行うことである。そして、構造記述に必要となる複文規則から、従来の研究では分類が不十分と思われる接続表現について考察を行い、構造記述の観点から改めて接続表現の分類を行う。

２．先行研究

まず接続表現と複文構造の関係に関する研究として、南(1974,93)がある。この研究では従属節（南(1974,93)では「従属句」）を、従属節末の表現や節内に出現する助詞・副詞などから、Ａ・Ｂ・Ｃに分類している。以下本研究ではこの分類を「南の分類」と呼ぶこととする。

Ａ：　ナガラ＜継続＞、ツツ、テ１、連用形反復、
　　連用形（形容詞・形容動詞）
Ｂ：　テ２、ト、ナガラ＜逆接＞、ノデ、ノニ、バ、タラ、
　　ナラ、テモ、テ３、連用形２、ズ（ズニ）、ナイデ
Ｃ：　ガ、カラ、ケレド、シ、テ４、連用形３

表１．南(1974)における接続表現の分類

そして、節と接続表現の関係を(ｱ)から(ｳ)のように述べている。本研究ではこれを「南の原則」と呼ぶこととする。

(ｱ) Ａに属するある従属句の一部になることが出来るのは、やはりＡに属する従属句である。
(ｲ) Ｂに属するある従属句の一部になることが出来るのは、やはりＢに属する従属句か、またはＡに属する従属句である。
(ｳ) Ｃに属するある従属句の一部になることが出来るのは、やはりＣに属するものか、あるいはＡまたはＢのものである。

（南(1974) p.124～126）

また、南(1974,93)の考察を基とする研究に、白井ほか(1994,95)、高橋ほか(1999)、長谷川(1999)がある。さらに田窪(1987)・益岡(1997)では、南の分類では説明できない疑問のスコープや節の焦点化という現象から、いくつかの接続表現の再分類を提案している（これに関しては後述する）。

また、南の学史的な意義について考察し細部について検討を加えたものに尾上(1999a)がある。尾上(1999a)では「従属句相互の包含可能性」という観点から、以下の(ｴ)から(ｶ)のような分類を行っている。

(ｴ)　ａ１類：ナガラ、ツツ、テ（情態修）
(ｵ)　ａ２類：バ、タラ（仮定）、ト（仮定）
(ｶ)　ａ３類：タラ（確定）、ト（確定）、テ（理由）、（ノ）ナラ、ノデ、ノニ、テ（並列）、ガ、カラ、ケレド、シ

しかし、ａ３類内の接続表現の根拠となる文には、「(ひまだからテレビを見ている）なら、人の仕事を手伝ったらどうか」「(忙しいけれど寝ていたら……」(p.99)のように、適格性の面で疑問を感じる文も含まれ、さらに細かく分類する必要があると思われる。

本研究では、南(1974,93)の問題点を、例えば「タラ・ダラで終わるもの」を「仮定的な意味のものも、確定(既定)的なものもいっしょに」(1993,p.81)している点にあると考える。連用形・テ形・ナガラに関しては、連用形１から連用形３、テ１からテ４のように、意味による分類を行っているが、他の接続表現は各種の意味のものを一括して扱っている。しかしそのように一括して扱うことに対する十分な論証が示されておらず、また他の接続表現にも分類が必要なものがあることも考えられる。さらに、南の原則では「なることが出来る」という記述であり、尾上(1999a)も可能性の記述であって、どのようなものが節の一部になり、どのようなものがならないのか、厳密な区別は示されていない。

以上の問題点を踏まえて、本研究では、接続表現の分類の中に再検討すべき点はないかを、節が含まれるか否かという構造の観点から見直す。そして分類が必要となる接続表現について考察し、新たな分類案を提示し、節の包含関係に関していくつかの条件を示してみたい。

３．対象

本研究では、考察対象を南（1974）（『現代日本語の構造』第４章）と南（1993）（『現代日本語の文法の輪郭』Ⅳ）の接続表現に限定し、接続表現という表層の情報だけを用いた複文解析を行う。なお南（1974）と南（1993）には、ツツ（逆接）や連用形（理由・原因）など一方にしか見られないものがあるが、接続表現の範囲を広くとり、これらを合わせたものとする。

複文規則は二つの接続表現からなり、節間の包含関係を表し、節間の結合度の強い順に並べられることとする。これは大量の文を処理し、正解が得られているか検証を加えていく過程で、新しい規則を追加し、順番の変更を繰り返すことで、結果的に規則は結合度の強い順に並ぶものと予測される。これによって第1解での精度を上がり、正しくない構造、いわゆるゴミの軽減が図られる。

本研究では、一文における節間の結合度の違いを規則として記述していくため、一文中に従属節が二つ以上含まれる複文が対象となる。これは従属節が一つの場合、主節と従属節の関係のみで、他の節との結合度の比較が出来ないためである。従来の接続表現に関する研究では、考察対象の接続表現を節末に持つ従属節が一つで、主節が一つという複文を扱うことが多いが、従属節を二つ以上含む複文を対象とすることで、さらに考察対象の接続表現と、他の接続表現の関係を考察することが可能となる。なお、従属節を二つ以上持つ文という条件から、結果として逆接を表すツツや「食べ食べ」のような連用形反復を節末に持つ複文は、以下に示すデータの中には見られなかった。

データは『戦後50年の作家たち』（文藝春秋）・『CD-ROM版　新潮文庫の100冊』（新潮社）・『文章宝鑑』（柏書房）から抜き出した1300文ほどの複文である（注1）。前提として、これらの文は構文解析が終了し従属節の認定が済んだものとする。また複文は従属節と主節からなり、その従属節は1個以上の従属節で構成され、主節は０個以上の従属節と1個の主節からできているものとする。

なお、(1)のように強調などで節の順番が変わったと考えられる文は対象外とする。また従属節はいくつかに分けられるが、従属節を益岡(1997)のように名詞節・連体節・連用節・並列節に分類した場合、本研究では、連用節・並列節に限定し、名詞節・連体節は除くこととする。また、(2)の下線部のようないわゆる話者の心的態度を表すモダリティ表現的な節も従属節として扱う。(以下“／”は、節の区切りを示す)

(1) しかし、東京からその電報を打ったことがわかっても／なんにもならないね、／あたり前の話だから。　(『点と』)

(2) <u>しかし理窟からいうと</u>、／これは少し矛盾した話で……

(以下略、『山本』)

3.1 方法

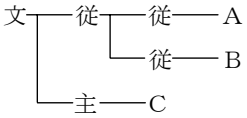
研究の手順として、あらかじめ複文を節単位で区切ったもの、接続表現、正解とする木構造を用意する。正解とする木構造に関しては後述する。次に、接続表現に複文規則を適用し、構造を作成する処理を行い、正しい木構造と同じものが作られるように、規則を追加・変更する。使用する複文解析システムは、筆者の自作で、ボトムアップの決定的処理を行い、最初の解析で得られた木構造が正しくない場合のみバックトラックを行い、他の可能性を探るものである。

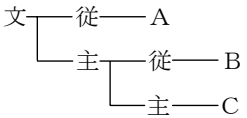
他の可能性を探る理由は、前述したように南の原則では従属節の一部に「なることが出来る」という記述であり、尾上(1999a)でも「可能性」であって、絶対に「ならなければならない」という記述ではないことによる。例えば、Ｂを節末に持つ従属節、Ｃを節末に持つ従属節、主節からなる複文がある時、必然的にＢ節がＣ節の一部になるとは述べていないのである。正しい木構造を作るために一度使用した規則を放棄しバックトラックを行い、別の規則を使用する必要があるものも考えられる。節の包含関係に関する必然的な「原則」を想定した場合、原則に沿った規則と反する規則と

いう観点から、形態的には同じ接続表現でも分類する必要があるものを検出して、考察を行う。

3.2 木構造

3.1で述べた正しいとする木構造を作成する方法について述べる。対象とする二つの節で文を作り、作成した文が自然かどうかを検証し、前の節が後の節に係るかを決定する。この時、前の節は接続表現のついた形で後の節は接続表現を除いた形で用いる。(3)aのように、AがBに係りBがCに係りAがCに係らない文の場合、(3)を正しい構造とする。AがBに係るかまたは係らず、BがCに係りAがCに係るような場合、(4)を正しい構造とする。AがBに係る文には、(4)aのような文があり、係らない文には(4)bのような文がある。

(3)


(4)


(3)a　学生の視線を背中に感じつつ、／次に進もうと考えていたら、／ふと、出席を取り忘れていたことに気づいた。　(『若き』)

(4)a　なまじっか、酒を禁じると、／酒に対して甘美な感情を抱くようになり、／酒に飲まれる人間ができてしまう。　(『太郎』)

(4)b　もう明子がいないのだから、／お店が終ったら、／一緒に帰りましょう。　(『砂の』)

なお、木構造の決定について判断が揺れるものもある。例えば「頭が痛かったから、薬を飲んで、病院に行った」のような文は、発話者が病院関係者の場合とそれ以外の場合では構造が異なり、可能性として二つの構造が考えられる。しかし本研究ではこのような場合、対象とする文を含む文脈から判断して、ある文に対応する正しい構造は一つとする。

４．結果

本研究の結果、165個の規則が得られ、全体の複文解析では、1275文中1104文、約87％の精度で正しい構造が記述できた。(5)は（ノデ＋ト→ト）（ト＋主→主）という規則を順に適用することで、正しい木構造が得られる。正しい構造が記述できなかった文に対しバックトラックを行った場合、171文で正しく記述でき、結果として全ての文で正しい構造が記述できる規則が得られた[注2]。(6)は(5)と同じ接続表現を持つが、(5)と同様に規則を適用したのでは、正しい木構造が記述できない。この場合バックトラックの過程で(ト＋主→主)(ノデ＋主→主)という規則を適用することで、正しい木構造が記述できる。

(5) 文┬─従┬─従──中間試験や宿題の出来は、それほど悪くはなかったので、
　　│　　└─従──どんな成績をつけてよいものかと迷っていると、
　　└─主──彼がひょっこり研究室に現われた。　　（『若き』）

(6) 文┬─従──その名の通り沖永良部島界隈から南の海に住んでいるので、
　　└─主┬─従──沖縄の海で潜っていると
　　　　└─主──よく目にする。　　（『まだ』）

なお、この規則を新聞社説（注3）・科学技術文（注4）各200文に適用した場合でも、バックトラックを行った場合も含めて、全体で上記とほぼ同様の結果となり（新聞社説182文（91%）、200文（100%）、科学技術文188文（94%）、200文（100%））、異なる分野でも有効であることが検証された。

５．考察

本研究の結果得られた規則の中には、南の原則に反するものがあることや、南の原則を強制的に適用した場合、正しい構造が得られず、バックトラックが必要となる接続表現が明らかになった。そこで南の原則に反する規則をもとに新たなグループ分けを提案し、バックトラックが必要となる接続表現から接続表現の分類とその際に必要となる基準について考察を加える。なお、考察には新たに『CD-毎日新聞91』や作例も追加して使用する。

5.1 南の原則に反する規則

5.1.1 カラを含む規則

南の分類ではＣ類に含まれるカラ節が、Ｂ類に含まれるノニ節の一部になる構造を持つ文には(7)のような文がある。この結果を、南の分類の一部修正案である田窪（1987）・益岡（1997）と比較し、考察を行う。

(7) 文――従――従――しみじみとして優しい田舎のさまざまな音に
　　　　　　　　　　囲まれているのだから
　　　　　　　　従――のんびりできそうなものなのに、
　　　　主――かえっていらいらしてくるのだった。　　（『あく』）

田窪（1987）ではカラにはＢ類とＣ類に入る場合があるとしている。判断の基準は、疑問のスコープに入るかどうかという点で、(キ)から(ケ)を基に、Ｂ類は疑問のスコープに入り、Ｃ類は入らないという観察によって上記の結論を導いている。

(ｷ) ??誰が来るのであわてているのですか。（文番号は本研究用に修正）
(ｸ)　誰が行ったから、彼女も行ったのでしょうか。
(ｹ) *誰がいますから、北海道へ行くんでしょうか。

田窪(1987)では、ノニの分類が明示されていないため、南の分類と同様Ｂ類と考えた時、(7)の構造はカラ節がＢ類のノニ節に含まれるとも考えられる。また田窪(1987)では、Ｂ類のカラは「行動の理由」、Ｃ類のカラは「判断の根拠」を表すとしており、(7)の「……田舎の様々な音に囲まれている」は「のんびりできそうだ」と思う判断の根拠に近いと思われ、Ｃ類と考えられる。よって(7)はＣ類がＢ類に含まれる形となり、カラの分類では(7)の構造を十分に説明できていないと思われる。

また益岡(1997)では、カラ節には現象レベルにある場合と判断レベルにある場合の２種類があるとしている。これらは、南(1974)の文の階層構造でいえばＢ類とＣ類にあたるものである。(7)の「しみじみとして優しい田舎の様々な音に囲まれているのだから」は益岡(1997)では現象レベルの表現と考えられるのでＢ類となり、ノニ節に含まれるというのは南の原則に適っているが、一方で(8)のような文も考えられる。

(8)　文┬─従┬─従──また今度売りに来るにちがいないから、
　　│　　└─従──あきらめられそうなのに、
　　└─主──なかなかウンといわない。　　（筆者作成）

(8)の「また今度売りに来るにちがいない」は、波線が示すように判断レベルを表すと考えられる。このように判断レベルを表すカラ節もノニ節に含まれるので、カラを「判断レベル・現象レベル」に分類するのでは不十分で、別の基準からの考察が必要となる。

そこで本研究では、(7)(8)のような文に対応するために「事実的表現に接続するカラ」と「非事実的表現に接続するカラ」に二分することを提案

する。ここで田窪(1987)のように「用法」としなかったのは、節の用法は他の節との関係で解釈が変わる可能性があるためで、本研究では接続する表現による分類を行う。本研究の「事実的表現」とは、「しみじみとして優しい田舎の様々な音に囲まれている」のような事実・常識・法則等を示すものや、「また今度売りに来るにちがいない」のように、予定や実現の確信度の高い表現と仮定する。(9)でノニ節の一部となるカラは、周知の事実を示している表現に接続していると考えられる。

(9) 文┬─従┬─従──ソ連ではいろいろ苦労しているのだ<u>から</u>、
　　│　└─従──目の下にクマがあってもいい<u>のに</u>、
　　└─主──まったく疲れを感じさせない。

(『CD-毎日新聞91、4月18日』)

さらに、南の分類でC類に含まれるカラが、B類に含まれるノデの一部になる規則が必要となる複文には、(10)(11)のようなものがある。

(10) 文┬─従┬─従──七十五歳という年齢である<u>から</u>
　　│　└─従──一人暮しも何かと不自由な<u>ので</u>、
　　└─主┬─従──高校生の頃バフィーはここに住み込んで
　　　　└─主──エレンさんを助けていた。　(一部略『若き』)

(11) 文┬─従┬─従──社長は話のあいだで、ときどき声の調子を高めるものだ<u>から</u>、
　　│　└─従┬─従──相手もそれに釣られて、
　　│　　　└─従──大きい声を出す<u>ので</u>、
　　└─主──よほど取りよかった。　(一部略『路傍』)

この場合も同様に、ノデ節の一部になるカラ節は、事実的表現に下接していると考えられる。一方「非事実的表現」とは、意志などを表す表現で、

あまり実例では多くないが、これらに下接した場合、(12)のようにノデ節がカラ節を含むことはないと思われる(注5)。

(12) 文┬─ 従── むろん、そんな金だけにいつまでも頼っている
　　　　　　わけにはいきませんから、
　　└─ 主┬─ 従── わたしは、ちょうどすすめる人があったので
　　　　　└─ 主── 近くの町にある信用金庫に勤めに出ようかと
　　　　　　考えました。　　(『エデ』)

このように、ノデ・ノニ節に含まれるカラ節の説明には、上記のような分類をすることが有効と考えられる。なお、ノデ節がカラ節に含まれる(13)(14)のような場合も、ノデは事実的表現に下接すると考えられ、事実的表現はカラ・ノデ節の一部になることができると思われる。

(13) 文┬─ 従┬─ 従── わたしが男の子でないので、
　　　　　└─ 従── 漁についていけませんから、
　　└─ 主── おかあさんがかわりにいきます。　　(『二十』)

(14) 文┬─ 従┬─ 従── 客が来たので
　　　　　└─ 従── 加藤はそこに突立っているのもおかしいから、
　　└─ 主┬─ 従── 奥へいって
　　　　　└─ 主── 席に坐った。　　(『孤高』)

なお、カラ節とノデ・ノニ節が共起した時、カラ節が事実的表現の場合ノデ・ノニ節の一部になることができ、カラ節が非事実的表現の場合ノデ・ノニ節に含まれないことについて、意味の側面からの考察は紙幅の都合上、別稿で行う予定である。

5.1.2「シ」を含む規則

Ｃ類に含まれるシ節がＢ類に含まれるノニ節の一部になる構造を持つ文には(15)のような文があり、同様にシ節がＢ類に含まれるノデ節の一部になるという規則が必要となる文には(16)のようなものがある。

(15) 文┬ 従┬ 従── つまり、合戦は何時のものでもかまわなかったし、
　　│　　└ 従── それなりの落武者はいくらでも存在するとは思われるのに、
　　└ 主── 彼等の内の誰一人として小さな坂道を登ろうとはしてくれないのだ。　(『たま』)

(16) 文┬ 従┬ 従── 彼は相手の言葉に好意を感じたし、
　　│　　└ 従── 自分をするどく追いつめたその思考の速度に敬意を抱きもしたので、
　　└ 主── こんなはぐらし方をすることはいかにもやましい気がした。　(『パニ』)

シ節－ノニ節、シ節－ノデ節が続く場合、(15)(16)のようにシ節がノニ・ノデ節の一部になることが多い。しかし全てのシ節がノニ・ノデ節の一部になるとは限らず、用例は少ないが(17)(18)のようにノニ・ノデ節の一部にならないものもある。このようにシ節に関しては、他の節の一部にならず主節にのみ係るＣ類と、他の従属節の一部になるＢ類の二つに分類する必要がある。なおこのようなシ節の分類は、最終的に意味解析で決定されるため、複文の構造を解析するにはＢ・Ｃ両方の可能性を持たせておくことが必要となる。(なお、表層の情報だけでこれらを分類するには、黒橋・長尾(1992)のような方法が必要となる。)

（17）文┬─従──九州の父へは、四五日前に金を送ったばかりだし、
　　└─主┬─従──今日行ったところへ金を借りに行くのも厚かましいし、
　　　　└─主┬─従──私は母と一緒に、四月もためているのに
　　　　　　└─主──家主のところへ相談に行ってみた。

（『放浪』）

（18）文┬─従──乳岩には刃物が当てられないし、
　　└─主┬─従──創口も開いていないので、
　　　　└─主──塗布剤は効果がない。　（『華岡』）

また、その他にも「連用形３＋ノデ」というＣ類＋Ｂ類の規則がある。この場合、連用形は接続助詞がつかないので、ある意味無標と考えられる。(19)の下線部は「なかったので」と言い換えられるため、連用３（原因・理由）として扱い、南の原則に反する形となったが、これは解釈にもよると思われるので5.2.2でもう一度言及する。

（19）日ごろから近所の交際がなく、／二月に殺されたとしても、／その後の姿を見た者がないので、／殺害時日は不自然ではなかったのです。　（一部略『点と』）

5.2 バックトラックが必要となる接続表現

解析の際、正しい構造を導くには適切でない規則が途中で使用されるため、バックトラックが必要となる接続表現がいくつか見られた。この問題を解消するには、接続表現それぞれの再分類が必要となる。そこで、個々に考察を加えていく。

5.2.1 タラ・トなど

まず、タラを含む複文について考察する。ノデ・タラは南の分類では共

にＢ類の接続表現であるが、(20)はタラ節がノデ節を含み、(21)はタラ節がノデ節を含まない例である。(20)(21)のノデ節は共にいわゆる理由を表す節と思われるもので、異なるのはタラ節である。タラ節には(20)のようにノデ節を含む事実的用法の場合と(21)のようにノデ節を含まない仮定的用法の場合があるため、このような用法の違いによる分類が必要となる(なお、タラ節の分類は蓮沼(1993)による)。

(20) 文┬ 従┬ 従── 適当な理由がすぐに思い浮かばなかったので、
　　│　　└ 従── 「日本人はそういうのが好きなのさ」と、
　　│　　　　　答えたら、
　　└ 主── 「悲しくなるために、わざわざお金を出して、
　　　　　レコードを買うの」と言った。　　(一部略『若き』)

(21) 文┬ 従── 非常に秘密な役所の要件で出張させる者があるので、
　　└ 主┬ 従── 万一あとで警察からでもきかれたら、
　　　　└ 主── たしかにその旅客機に乗ったと答えてくれ
　　　　　たまえ。　　(一部略『点と』)

また、ト節に関しても構造記述の観点から二つに分類する必要がある。これをカラ節との関係で見ると、「カラ(C)＋ト(B)」という規則を適用する必要がある文には(22)のようなものがあり、規則を適用しない文には(23)のような文がある。

(22) 文┬ 従┬ 従── そのとき、亮子に熱があったものだから、
　　│　　└ 従── どうしたのですか、と聞くと
　　└ 主── 「十九日から湯河原に行って今朝帰りました。少し
　　　　　遊びすぎたので疲れたのでしょう」と、亮子は言った
　　　　　そうです。　　(『点と』)

（23）文┬─ 従──非公開の話だから　　（『CD-毎日新聞91、2月18日』）
　　└─ 主┬─ 従──関係機関に照会すると、
　　　　└─ 主──もうけ話がだめになる。

トの分類に関しては、有田（1993）にいろいろな案がある。しかし、構造記述の観点からは、このように事実的な用法と仮定的用法の二つに分類する必要があると思われる。

また、バに関しても、（24）のようにバ節がノデ節・カラ節を含まない複文も（25）のようにバ節がノデ節・カラ節を含む複文もある。これらも、タラ・トと同様に事実的用法と仮定的用法に分類する必要がある。

（24）文┬─ 従──彼は難関の医学部進学を狙っているので、
　　└─ 主┬─ 従──私が落第点でもつければ
　　　　└─ 主──それで終りなのだ。　　（『若き』）

（25）文┬─ 従┬─ 従──これからのち、山本の戦死にいたるまで、
　　│　　│　　　　暗号の問題は、かなり大きな蔭の問題に
　　│　　│　　　　なって来るので、
　　│　　└─ 従──書き添えておけば、
　　└─ 主──海軍の乱数暗号は、発信用暗号書と、受信用暗号書と、
　　　　使用規定と乱数表の四冊から成っていた。
　　（一部略『山本』）

以上のように、タラ・ト・バに関しては構造からカラ節・ノデ節を含むもの（事実的用法）と含まないもの（仮定的用法）の二種類に分類する必要がある。なお、尾上（1999a）ではタラとトのみに仮定・確定という区別を行っており、この部分では本研究の考察と一致する（なお、尾上（1999a）

ではバに関しては用法が限られているということで除外している)。

なお、同じく条件の意味を表すとされるナラは、鈴木(1993)で述べられているように、ナラ条件文の性格が「ある状況を設定するもの」であるため、上記のようなノデ節・カラ節を含む、ある状況が起こったことを表す事実的な用法はないと見られる。

さらに、トに関しては従属節の一部に含まれない用法が見られる。例えば(26)のような用法で、国立国語研究所(1951)では「次の発言の準備としての前おき(p.116)」と分類されるものである。

(26) 文┬─ 従── また地域別でみると、
　　└─ 主┬─ 従── 大都市では交通の不満を一番にあげるが
　　　　└─ 主── 郡部ではゴミ・し尿だった。

(一部略『CD-毎日91、3月20日』)

しかし、(27)のように対比構造を持つ従属節の一部に係り、従属節の一部をなすト節も見られるため、節に含まれることがないとは断定できない。

(27) 文┬─ 従┬─ 従── 表面だけ見ると
　　│　　└─ 従── 穏かそうだけれど、
　　└─ 主── 下の方ではすごい渦をまいてるのよ。(一部略『世界』)

従ってこのような構造の決定には「前おき」という分類だけでは不十分と考えられ、前出のシ同様、最終的な構造決定には意味解析からの情報が必要となる。なお、バ・タラについて(26)と同様の構造を持つ用法を考えるのは、文体差等から若干不自然と思われる。

5.2.2 連用形・テ形

バックトラックが必要となる複文には、連用形・テ形を従属節末に持つ

ものが多い。(28)は（連用形＋主→主）（ズ＋主→主）の順に規則を適用した場合、正しい構造が得られず、（ズ＋連用形→連用形）（連用形＋主→主）という規則が必要となるものである。この場合「フロントにいい」と「その部屋に入った」は、「＜継起的または並列的な動作・状態＞の意味を表すもの」（南(1993)）つまり「連用形２」と解釈されるが、「松木は……いい」と「結花も……入った」は主語が異なるため、「連用形４」とも解釈できるため、バックトラックが必要となる。

（28）文┬─従┬─従──松木は結花に相談もせずに
　　│　　└─従──ツインの部屋を、とフロントにいい、
　　└─主──結花も当然のことという顔で、ボーイが案内して
　　　　　　くれたその部屋に入った。　　（『花梨』）

ここで、南(1993)の連用形４について見ると、連用形４を『テで終わるもの、または連用形で終わるものの中にＣ類に入れてよいと思われるものがある。それぞれ「～テ４」「～連用形４」とする』とし(ｺ)(ｻ)をあげている。（p85, 表記・文番号は本研究用に修正）

(ｺ) たぶんＡ社は今秋新機種を発売する予定でありまして、他社の多くもおそらくそれに対抗する計画を考えることでしょう。
(ｻ) この問題の行方は当事者両国それぞれの政府の意向にかかっており、なりゆき次第ではその影響が他地域におよぶおそれなしとしません。

南では、用例のみの提示で厳密な規定がされていない。また接続表現の分類は、従属節一つ主節一つの場合を想定している。しかし、複数の従属節を含む複文の場合、テ形・連用形はどの節との関係で分類が決まるのか、その判定法が必要となると思われる。例えば(29)の場合、テ形（「覚えて」）

は「店をきりもりするようになった」との関係では＜継起的または並列的な動作・状態＞と考えられるが、「三年もすると」との関係では「覚えたので」とも言い換えられ、＜原因・理由＞と考えられる。

（29）最初は簡単な事務仕事を手伝っていたが、／そのうち仕入れや客の応対を覚えて、／三年もすると／綾子が店をきりもりするようになった。（『夜桜』）

この問題に対して、尾上（1999b）では、B類に位置づけられるテ形はどこに分類しても破綻が生じるとして対象から除外している。本研究では、「連用形２」「連用形４」など他の従属節との関係から複数の解釈が可能な場合、構造記述の視点からどちらを優先するかなど、分類上、南（1974,93）よりも厳密な規定をつけることによって解決できると考えるが、これについては別稿に譲りたい。

5.2.3 ガ・ケレド

ガ・ケレドは、先行研究（国立国語研究所（1951）、森田（1980）等）では、逆接・提題・前置き・いいさしなどに分類されることが多い。構造から考えた時、ガ節・ケレド節を含む複文の中には、（30）と（31）のように係り受けの構造が異なるものがある。（30）の場合先行する連用節を含み、（31）の場合先行する連用節を含まず、正しい木構造を記述するにはバックトラックが必要となる。この場合、「かつての大方のメムバーが……感じを持ったのだが」は、前置きや話者の心的態度を表示する、いわゆるモダリティ表現的な節と分類されるものであるが、これらは（30）のように他の節を含んだり他の節に含まれたりすることはないので（注6）、別に分類する必要がある。

（30）文┬─従┬─従──角田君は慶応の経済学部に学び、
　　│　　└─従──一年ほど彼のお父さんの経営する経理事務所
　　│　　　　　で仕事をしていたのですが、
　　└─主──今回、縁あって当社の強力な編集スタッフとして
　　　　入社されたわけです。　　（一部改『新橋』）

（31）文┬─従──さらに一年たち、
　　└─主┬─従──かつての大方のメムバーが意表をつかれる感
　　　　│　　じを持ったのだが、
　　　　└─主┬─従──マダム「河馬の勇士」と、グループの
　　　　　　│　　男二人との間に性関係が発生し、
　　　　　　└─主──こじれたあげく本人は北海道の実家へ
　　　　　　　　帰った。　　（『河馬』）

６．まとめと今後の課題

以上、南の分類のように各種の意味のものを一括して分類する見方に対し、構造記述の観点から見た時、必要となる分類について考察した。そして、カラを事実的表現に下接するものとそれ以外に分類すること、シをＢ類・Ｃ類に分類することを提案した。また、タラ・ト・バについては節の包含の可能性から、仮定的用法と事実的用法に分類する必要があることを挙げ、さらにトに関しては前置き的表現という観点を挙げた。連用形・連用テ形については南の基準よりも厳密な、優先される解釈などの定義が必要となることを挙げた。また、ガ・ケレドについてはモダリティ表現的な節とそれ以外の節という分類の必要性を挙げた。

接続表現の分類が増えると、結果的に規則も増えることになる。本研究では紙幅の都合上、グループ分けには言及できなかったが、これには複文内における接続表現の共起に関する調査・考察が必要となるので、別稿で詳しく行いたい。また、南の分類や南の原則のように、規則に含まれる接

続表現を例外なく分解するにはいくつのグループを設定するのがいいかが今後の課題となる。

さらに、研究対象に並列句を明示的に含めた場合、並列構造を検出することの難しさが挙げられる。今後は接続表現を用いた複文解析で可能となる処理と、意味解析からの情報が必要となる処理を明確に区別していくことが必要となる。

注１　本研究では1300文ほどを対象としているが、継続的にデータを増やしている。また、出現しなかった接続表現の組み合わせ、例えば「～ガ、～ケレド、主節」のような複文については、今後数量的な側面から、どのような傾向が見られるのか考察を加えていきたい。

注２　正しく記述できなかった接続表現の特徴については後述するが、(i)のように節の数が多い複文は、概して第一回の解析では正しい解が得られず、バックトラックが必要になることが多かった。

(i)　女は子供が寝入った後、男の見ている前で裸になり、／山から流れ出る清水を汲み、／置いていた手桶に布をひたして、／首筋、乳房をぬぐい、／「ああ、さっぱりする」と言い、／男に背をむけて／身をかがめ、／小声でなにやら唱名しながら／脇腹と股間をぬぐった。　（『伏拝』）

注３　新聞社説は朝日新聞（1985－91年）より、ランダムで日付を選び、その日の社説の冒頭から条件に合うものを探し、この作業を繰り返して抜き出したものである。

注４　科学技術文は「RWC テキストデータベース」（RWC データベース・ワークショップ（株）メディアドライブ1996）よりに含まれる、通産省報告書形態素解析データ（通商白書平成4－6年度等）と、日本電子工業振興協会報告書形態素解析データ（自然言語処理の動向に関する調査報告書）を、本研究で使用可能な形に修正し、本研究の条件に合う文を冒頭から抜き出したものである。

注５　なお、(ii)はカラが事実的表現に下接していながら、ノニ節の一部とするのは不自然と思われるため、反例のように考えられるが、(ii)は(iii)の下線部のような節が省略されたものとするのが適当かと思われる。

(ii)　明日は日曜日だから今日は疲れているのに、頑張った。　（筆者作例）

(iii)　明日は日曜日だから、<u>休めるので</u>、今日は疲れているのに、頑張った。　（筆者作例）

注６　なお、(iv)の下線部のように複数の節からモダリティ表現が構成される場合は、この場合に当てはまらない。

(iv)　さらに一年たち、<u>かつての大方のメムバーは驚き</u>、あきれたけれど、～

（筆者作例）

参考文献

尾上圭介（1999a）「南モデルの内部構造」『月刊言語』28-11 大修館書店

尾上圭介（1999b）「南モデルの学史的意義」『月刊言語』28-12 大修館書店

有田節子（1993）「日本語条件文研究の変遷」益岡隆志編『日本語の条件表』くろしお出版

黒橋禎夫・長尾眞（1992）「長い日本語文における並列構造の推定」情報処理学会論文誌 33-8

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞―用例と実例―』秀英出版

白井諭･横尾昭男･池原悟･木村淳子･小見佳恵（1994）「日本語従属節の依存構造に着目した係り受け解析」日本語処理 102-9

白井諭･池原悟･横尾昭男･木村淳子（1995）「階層的認識構造に着目した日本語従属節間の係り受け解析の方法とその精度」情報処理学会論文誌 136-10

鈴木義和（1993）「ナラ条件文の意味」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版

高橋博之･宮崎正弘（1999）「規則と用例を用いた構文意味融合型日本語構文解析」情報処理学会誌自然言語処理研究会 132-11

田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5

蓮沼昭子（1993）「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版

長谷川守寿（1999）「従属節の係り受け構造の形式化」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』14

益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

森田良行（1980）『基礎日本語2』角川書店

出典

『CD-ROM版　新潮文庫の100冊』（新潮社、1995）より、点と：『点と線』松本清張／山本：『山本五十六』阿川弘之／若き：『若き数学者のアメリカ』藤原正彦／太郎：『太郎物語』曽野綾子／砂の：『砂の上の植物群』吉行淳之介／路傍『路傍の石』山本有三／エデ：『エディプスの恋人』筒井康隆／パニ：『パニック』開高健／放浪：

『放浪記』林芙美子／華岡：『華岡青洲の妻』有吉佐和子／世界：『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹／新橋：『新橋烏森口青春篇』椎名誠
『戦後50年の作家たち』（文藝春秋、1995）より、まだ：『まだらの紐』石原慎太郎／伏拝：『伏拝』中上健次／あく：『あくる朝の蝉』井上ひさし／たま：『たまらん坂』黒井千次／花梨：『花梨』高橋治／夜桜：『夜桜』宮本輝／河馬：『河馬に噛まれる』大江健三郎

付記
本稿は、2000年9月30日に東京女子大学で開かれた計量国語学会第44回大会で発表した内容に、加筆・訂正したものです。発表の際、有益な御意見を下さった、筑波女子大学草薙裕教授に感謝申し上げます。